

# 海ノ民話から学ぶ 海のめぐみ

## はこだて国際科学祭 2025 座談会

2025年8月24日、函館市地域まちづくりセンターにて、日本海洋文化総合研究所（以下、海総研）が進める「海ノ民話学プロジェクト」の一環として、「はこだて国際科学祭」のプログラムの中でイベントを開催した。

はこだて国際科学祭は、毎年2週間にわたり、函館市内外で科学の魅力を伝える催しである。本イベントは、昨年度発行した『海ノ民話学ジャーナル』の寄稿者である、はこだて未来大学の美馬のゆり氏（はこだて国際科学祭運営委員長）から、お声がけをいただき実現した。

「科学」と「民話」は、一見異なる分野に見える。しかし、海の民話を学術的に読み解き、その価値を探究・発信することは、海の民話を科学することに他ならない。

当日は、北海道の海ノ民話アニメーション『ムイとアワビの合戦』および『折居婆さんと鯨』を題材に、座談会と粘土ワークショップを実施した。民話を読み解く多様な視点を共有するとともに、アニメーションを通じた共有・継承の可能性を探った。

座談会では、海総研理事の栗原憲一氏がファシリテータを務めた。また、パネリストとしては、海総研理事・石村智氏、株式会社WMIおよび株式会社まるらす代表取締役・伊藤慶子氏、学習院大学および武蔵野大学非常勤講師・久保華誉氏、江差町教育委員会学芸員・小峰彩椰氏、海ノ民話のまちプロジェクト統括プロデューサー・波房克典氏ならびに同プロデューサー吉田沙織氏が登壇した。

### 変化し続ける民話

口承文芸に詳しい久保氏から、民話の定義について説明があった。民話は、「民間説話」の略称であり、神に関する「神話」、実在の事物に結びつく「伝説」、場所や人物が特定されない「昔話」、同時代の身近な出来事を語る「世間話」に分類される。



久保華誉氏

さらに、無形文化遺産の研究に携わる石村氏は、民話は文字ではなく口で伝えられる「口頭伝承」により、人から人へ語り継がれ変化してきたと補足した。有形文化遺産とは異なり、変化を受け入れることが重要だと述べた。

### 海流の交わりが生む多様性 —ムイとアワビの合戦より

北海道函館市に伝わる海ノ民話『ムイとアワビの合戦』のアニメーション鑑賞と、制作に携わった吉田氏による作品紹介が行われた。

この民話は、海底に住むムイ（オオバンヒザラ



吉田沙織氏

ガイ) とアワビ (エゾアワビ) という、同じ祖先を持ついとこ同士の争いを描いた物語である。度重なる争いに怒った神が、両者の住処を東西に分けたと伝えられている。

舞台となる函館市戸井地区の海は、寒流と暖流が交わる栄養豊富な海域で、古くから漁業が盛んな地域である。特に武井の島周辺は、好漁場として知られ、ムイとアワビにとっても良好な生息環境が整っている。

アニメーションでは、ホッケやウニ、コンブなど多様な生物の姿が丁寧に描かれている点も見所だ。

本作は、争いが共存の場を失わせるという普遍的なテーマを通じて、海洋資源の大切さと共生の重要性を問いかけている。



海ノ民話アニメーション『ムイとアワビ』

現在、海ノ民話のまちプロジェクトの一環として、函館市内の小学校の修学旅行に同行し、フェリー内で本民話を活用した学習を実施している。その結果、こどもたちが海を「自分ごと化」する機会が生まれている。

## 地域に伝わる民話の読み解き

続くディスカッションでは、各パネリストが専門の視点から本作品について言及した。

久保氏は、生き物の棲み分けをテーマとする民話は他にも存在すると述べた、四国の『狐と狸とお大師さん』を例に、物語に登場する生き物は、地域の自然環境や人の暮らしを反映した身近な存在であると指摘した。





伊藤慶子氏

一方、伊藤氏は、藻場の現況等を踏まえ、かつて語られた棲み分けは過去の姿であり、現在は、混在やアワビの北上がみられると説明した。民話の内容も、時代や環境に応じて変化してよいのではないかと述べた。

さらに石村氏は、「食」の観点から、保存できないムイと、干しアワビとして流通し経済資源となったアワビの違いに着目し、その背景が、物語の争いに反映されている可能性を示した。これらの議論を通じて、生態系や経済活動の視点で民話を読み直すことにより、語られた時代や地域の背景が明らかになった。



小峰彩椰氏

## 今なお語り継がれる民話 —折居婆さんと鯨より

北海道江差町に伝わる海ノ民話『折居婆さんと鯨』のアニメーション上映と、江差町で学芸員を務める小峰氏による作品紹介が行われた。

本作は、かつて江差が鯨漁で栄えた歴史を伝える物語である。知恵ある老人・折居婆さんは、不

漁に悩む村人のため、不思議な老人から授かったかめ籠の白い水を海にまき、鯨の大漁をもたらす。網は破れるものの、再び老人の助言を受け、必要十分な漁が可能となった——

小峰氏によれば、このアニメーションの元となる『折居伝説』は江差で広く知られ、鯨漁の反映や北前船交易の歴史を伝える重要な民話だという。

鵜島やヘイシ岩など、実在する場所が登場し、「白い水」は鯨の大群による産卵現象「群来ぐんき」を指すとされる。

また、姥神大神宮渡御祭などを通じ、民話は現代の地域文化にも息づいている。

さらに、時代と共に語りが変化し、現在も教育活動などを通じて受け継がれている点が特徴だ。



石村 智氏

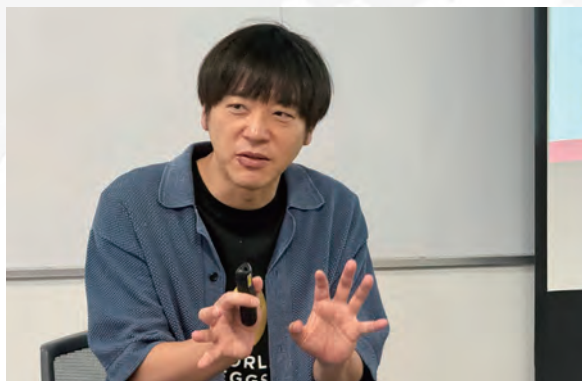
## 民話に込められた自然観と 現代への問い

「折居伝説は、日本の昔話の良さがしっかり詰まったお話です。」と久保氏。来訪神を思わせる折居婆の存在や、動植物に魂を見出す自然観が、その特徴として挙げられた。

また、石村氏は、鯨の乱獲の背景について言及した。鯨はアワビと同様に、北前船の主力商品であり、「しめかす」として肥料化されることで、長期保存と流通が可能となり、高い経済価値を持った。その結果、鯨の乱獲が進んだ側面があるという。こうした歴史的背景を踏まえ、昔話は過去を伝えるものではなく、現代の視点から読み直すことで、新たな意味を見出せると述べた。



栗原憲一氏



波房克典氏

## 海ノ民話アニメーションの可能性

海ノ民話アニメーションの未来について、栗原氏の問いを受け、パネリストは見解を述べた。

石村氏は、民話は固定的に保存されるものではなく、時代や語り手によって変化していく点に価値があり、アニメーション制作も一つの解釈の結果であると述べた。

久保氏は、民話を語り継ぐ場づくりの重要性を指摘し、アニメーションによる可視化は、わかりやすさの点で有効な手段になると評価した。

制作の立場から吉田氏は、地域の人々とともに制作している点が大きな特徴であり、民話が地域のアイデンティティとなる可能性を示した。

波房氏は、学術的な知見を地域の未来に活かすため、アニメーションを活用した対話の場づくりの重要性を強調した。

海ノ民話アニメーションは、実際の地域を題材とし、地元の人々とともに作り上げられている。そのため、単なるフィクションではなく、歴史や生態系と結びつけながら読み解くことができるのだ。

また、アニメーションという表現を用いることで、世代や立場を超えて共通の認識を持ちやすく、誰にとっても理解しやすい点も大きな特徴である。民話を未来へ語り継ぐための有効なツールとしての可能性が示された。

## 自ら手を動かし海に想いを馳せる —クレイアニメーションワークショップ

座談会に続いて行われたワークショップでは、自然環境下で分解する粘土「みんなの粘土」を用い、海ノ民話から受け取った印象や、議論を通して生まれた気づき・問いを形にする試みが行われた。

まず、函館商業高校マンガ研究部によるクレイ作品を鑑賞し、絵画アニメーションを粘土表現へと変換する過程を共有した。その後参加者は、民話の世界を自由に想像し、登場人物や海の生き物、現代的な要素も取り入れながら制作を行い、民話とその背景にある文化や歴史への理解を深めた。

民話は、物語が一度語り手の中に受け止められ、再び語られる中で受け継がれていく。今回、語り場と制作体験を通じて、民話を自分ごととして捉える視点が共有されることは、民話を未来へ手渡していくための一つの手応えとなった。

フェロー  
石丸優希

